

2012.07.18

「JAL 再上場のインサイダー疑惑」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。今日は7月18日です。今日から、参議院で税と社会保障の一体改革の審議が始まりました。それに先立って、昨日、また民主党から3人の離党者が出ました。おそらく、審議が進めば進むほど、離党者が出てくるのではないかと考えています。その理由は、税と社会保障の一体改革案やその他様々な政策についても、民主党の中でしっかりと議論を行った形跡がないからです。野田総理が自らの政治生命をかけると言って、この法案の審議は始まっていますが、ならばこそ、党内で合意形成をしておかなければならなかったのだと思います。しかし、自らのパフォーマンスと言いましょうか、合意形成のできないまま政治生命をかけるということで政権浮揚をしようという下心が見えています。このことに対して、党内から反発をする離党予備軍が出てくるでしょう。その結果、政権運営がままならないどころか、そもそもこの法案自体が通らないという事態もあり得るでしょう。

以前にもこのビデオレターで申し上げましたが、我々が三党合意した理由は、あのマニフェストを止めるということです。無駄なばらまきを止めて税と社会保障の一体改革をすると言うから合意をしているのであって、彼らがマニフェストを捨てずに実現していくと言うのなら、我々がそのようなことに手を貸す必要は全くないのです。民主党の中で合意されていないことを、我々が尻拭い

する必要は全くないのであって、政権担当能力のない方々にはさっさと辞めて頂く必要があります。

そして、今日はもう一点、JALの問題についてもお話させていただきます。先程、私のところにメールが来ました。JALの現役社員で、国を想う立派な方だと思われます。その方が仰るには、自分達は一生懸命二次破綻しないようにやってきた、会社更生法によって手厚い優遇措置が執られたが、これはJALに限ったことではなく、他の企業も会社更生法をすれば税金の免除などを受けられるのだから、そのことをもってJALの再生が出鱈目だと言うのはおかしい、といった主旨でした。JALの社員の方からすれば、その通りだと思います。私が出鱈目だと言っているのは、そういったことではなく、もう少し根本的な問題なのです。

そもそも、なぜJALを再生しなければならなかったのか、ということが問題です。JALという航空会社が運航している路線がインフラそのものでありますが、ネットワークがなくなってしまうと、利用者である多くの国民が足を奪われてしまうことになります。この足を守ることがJAL再生の本来の意味なのです。ところが、今回行われたJALの再生は肝心の足の部分を考慮していません。儲からない路線はどんどん切っていき、儲かる路線は会社更生中にもかかわらず、路線を新たに追加し認定しました。これはJALを助けるための支援であって、路線を守るための支援ではないのです。この考え方自体が方向

性をおかしくしており、本末転倒になっています。

一番大きな問題として、JAL は破綻しましたがその原因として、放漫な経営のあり方や人事管理ができていないといった労使関係の問題、これらは JAL 固有の問題であります。しかし、もう一方では、世界の航空会社がこの数年の間に立て続けに倒産しています。その原因はオープンスカイの名のもとで、規制緩和をして競争原理が導入され、運賃が安くなったことで、先進国の航空会社は大きなダメージを被ったのです。生き残った会社は例えば、ドバイの航空会社のように有り余るオイルマネーで運営でき、安い人件費で航空機を飛ばすことができる、後進国でお金のある会社でしか成り立たなくなってしまう可能性があります。そうなったときに、我々の足である路線を守ることができるのかを考えると、その答えは否、ノーであります。国交省がしなければならなかったのは、大きな目で航空政策をどうするのか、オープンスカイ政策がもたらした結果はいかなるものだったのか、ということをもう一度原点から見つめ直すことなのです。運輸省は国土交通省になったのですから、飛行機だけでなく、港湾、鉄道、高速道路などを含めた国土交通政策としての航空産業のあり方を考えた再生をしていかなければならなかったのです。しかし、全くこのような視点を持たないまま JAL を再生して、立派な会社に戻すことだけに視点を置いて進めたことで、どうなったでしょうか。

確かに、JAL は立派な会社になって戻ってきました。それは、当然の事でし

よう。なぜなら、民間銀行などから 5250 億円の借金の棒引きをしたり、既存株主が 2500 億円の資本金を放棄させられたことで、およそ 8000 億円の投入されているからです。さらに、企業再生支援機構を通して政府が 3500 億円を出資しました。JAL も ANA も共におよそ 1 兆円の借金がありました。JAL は借金の棒引きをし、新たな資本の投入をする、これから 1 兆円の利益が出るまで税金がかからない、ということは毎年 2000 億円近い利益が出ていますから、5、6 年で 1 兆円の利益が貯まってくるのです。そうなったとき、JAL は無借金で、かつ 1 兆円の現金資産を持つ超優良企業になるのです。方や ANA は、健全経営を進めてきたけれども、やはり機材を買うためなどの借金が重なって、9000 億円を超える借金を持っています。ですから、数年後には JAL が ANA を買い取ることができるだけの体力を持つ会社になるのです。これは本末転倒なことで、潰れたはずの会社が健全経営の会社を飲み込んでしまうということになりかねません。

なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。これはまさに JAL の再生だけを念頭に置いて、航空行政全体としての大きな絵を国交省が描いてこなかったことが原因です。航空行政としての政策がないことが一番の問題であり、さらに産業政策としても、一旦潰れた会社が健全な会社を飲み込んでしまうような競争環境を作ること自体、常識的な経済のルールにおいて、あり得ないことです。

企業再生法の趣旨は会社を再生させることでなく、新たなスポンサーを見つけて、公共財を担保していくことにあります。本来、企業再生機構は JAL のような大会社を支援するのではなく、地域の中堅企業の支援に当たり、雇用を守り、町との関係性を保つために作られました。最も重要なことは、公共財を守ることであり、この公共財を運営するスポンサーを見つけることが仕事なのです。ですから、この法どおりに行うと、JAL の場合は政府が資本の投入をする以前に、まずはスポンサーとして JAL を運営してくれる会社を探すべきです。JAL のスポンサーをできる会社は日本に一つしかありません。それは、ANA です。ANA に JAL の運営の依頼や出資を投げかけるべきだったのです。ところが、ANA に訊きましても、そのような投げかけは一度もないということです。ANA はスポンサーとしての申し出をする機会のないままに、JAL は再上場をし、ANA を上回る財務内容で市場にもう一度戻ってくるのです。これは産業政策として、企業再生機構の本来の法の趣旨として、おかしいことです。

先に述べたとおり、3500 億円の資本注入が行われましたが、それにプラスして 127 億円を民間企業が出資していることを国民の皆様はご存知でしょうか。昨年 3 月 28 日に JAL は一般企業に復帰したのですが、その 2 週間前の 3 月 15 日に京セラをはじめとする 8 つの会社が 127 億円の増資を行いました。3500 億円では心もとないと思って民間からも資本注入したが、127 億円しか

集まらず、もっと増資をしてほしかったと説明されていますが、これはおかしい話なのです。本当に資本注入しないと会社のお金が回らないなら、もっと早い時期に、つまり会社更生法を申請した一昨年の1月の時点で資本注入を行うはずです。しかし、実際は会社更生法を卒業する2週間前に資本注入しました。

この時期の増資が持つ意味は、増資した2週間後に一般企業に復帰し、1年後に再上場することを念頭に置いているとしか考えられないのです。この8つの会社は、巨額のキャピタルゲインを獲得する権利をその時点で得ることになるのです。これは、インサイダーと言わざるを得ません。現在のインサイダー法の規定の中では、上場企業以外は適応しないので、インサイダーの罪には問われない、とされています。しかし、法に問われなくても、モラルとしてあり得ないだろうと私は指摘しているのです。

このように考えると、JALの再生は誰のための再生だったのか、本当に国民の足を守るための再生だったのでしょうか。結局、路線は切ってしまって、いいところだけ残し、再上場をめぐるのは特定の方々だけがキャピタルゲインを得るという仕組みになっているのです。これは、官制の企業再生にからむ、とんでもない大きな問題で、犯罪的行為と言わざるを得ません。このことを国民のほとんどの方がご存知ないのです。私は自民党の航空問題のPTでもこの問題について何度も質問してきて、ようやく自民党の中では再上場を認めないという決議を出しました。しかし、何が問題なのか、まだ分かっておられない方々

が多過ぎます。これから私は色んなメディアを使って、記者の皆様方、政治家の皆様方にも実態を知らせるつもりです。このまま上場させ、一旦民間企業になってしまうと政府の管理を離れるので、上場前に問題の解明を行うためにもJALの鶴の足に足かせをかけておく必要があるのです。そのことを是非、皆様方に知って頂きたいのです。このビデオレターを多くの方々に拡散して頂いて、JALの上場において行われてきている問題点を知って頂きたいと思います。

本日も御覧頂きありがとうございました。